

トマス・アクィナスにおける人間の魂の個体化

——魂と身体の間をめぐって——

石田 隆太*

序

トマス・アクィナスの著作においては「個体化の源 (principium individuationis) は質料である」という言説が散見される¹⁾。「個体化の源」という概念はトマスにおいては主として複合実体 (人間もそれに含まれ

* 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学 / 日本学術振興会特別研究員 DC2。なお本稿は、平成 27 年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費, 課題番号: 15J00085) による研究成果の一部である。

本稿で用いるトマスの著作の略記は以下の通りである。

BT: *Super Boetium de trinitate*

CL: *Super primam epistolam ad Corinthios lectura*

CT: *Compendium theologiae*

EE: *De ente et essentia*

QA: *Quaestiones disputatae de anima*

QP: *Quaestiones disputatae de potentia*

QQ: *Quaestiones de quolibet*

QS: *Quaestio disputata de spiritualibus creaturis*

QV: *Quaestiones disputatae de veritate*

RV: *Responsio ad magistrum Ioannem de Vercellis, de 108 articulis*

SG: *Summa contra gentiles*

SS: *Scriptum super libros Sententiarum*

ST: *Summa theologiae*

UI: *De unitate intellectus*

なおトマスの原典の引用・参照は基本的にレオ版に依拠するが²⁾、レオ版がないものに関しては別の版を用いることにする (詳しくは文献表を参照のこと)。また本文中の [] による補いおよび註で引用する原文での [] による補いはすべて本稿筆者によるものである。

1) この言説が出てくる箇所は枚挙に暇がないが、典型的な用例は次の通り: Cf. *SS*, I, d. 36, q. 1, a. 1, cor.; II, d. 3, q. 3, a. 3, cor.; IV, d. 50, q. 1, a. 3, cor.; *SG*, I, cap. 44; II, cap. 100; IV, cap. 63; *ST*, I, q. 86, a. 3, cor.; *QV*, q. 2, a. 5, cor.; *QA*, q. 20, cor.

る)の「個」の成立を説明するものであり、個がどのような文脈で語られるのかに応じて強調点は異なってくる。哲学的な言説としてこれを受け取ろうとした際には、大別して認識論的な観点と存在論的な観点があると言えるだろう²⁾。すなわち、われわれが日常で経験するような個の認識という観点と、その基盤にもなっている個の在り方を問う観点である³⁾。

個体化をめぐる文脈の一つとして、トマスは人間の魂の個体化について語ることがある。人間の実体形相である知性的魂は、それ自体としては種的形相として人間という種すべてに共通であるが故に、人間一人一人の魂を個として捉えるためには、普遍的な種的形相としての魂とは別に個であることを成立せしめる何かが必要となる⁴⁾。このような問題意識の下でトマスは、魂の個体化とそれにおける質料としての身体の役割について述べている⁵⁾。したがって、トマスが個体化について述べる議論領域の一つに魂の個体化という論点があることを踏まえれば、「個体化の源」という概念が魂の個体化という個別的な問題においてどのような役割を果たしているのかを考察することができるだろう。

以上を踏まえて本稿が試みるのは、魂の個体化を人間全体の個体化の中に位置付けようとすることである。知性認識を行うことができる人間の魂は、動物の魂などと比べればその働きはたしかに自存するものであると言える⁶⁾。しかしながら、その知性認識の働きを行う主体として実際に捉えられるのは、魂と身体からなる複合体としての人間であることが、いわゆる「知性単一説」に異を唱えるトマスの主要なモチーフでもあったことを想起する必要がある⁷⁾。

2) Cf. Klinger (1964), p. 65; 加藤 (1985), p. 134; 大鹿 (1996), pp. 1-2.

3) 本稿はもっぱら存在論的な観点から個としての人間について考察するものである。

4) 無論、人間の知性的魂は全人類にとって一つしかないと素朴に考えるいわゆる「知性単一説」においてはこのような問いは生じないであろうが、少なくともトマス自身の立場が「知性単一説」でないことは言うまでもない。Cf. 川添 (1995); 桑原 (1996)。

5) クリンガー (Klinger (1964), p. 13) によれば、身体を通じた人間の魂の個体化が述べられている箇所は次の通りである (列挙の順番は、クリンガーが採用している著作年代に即している): *SS*, I, d. 8, q. 5, a. 2, ad 6; *II*, d. 17, q. 1, a. 2, ad 1; q. 2, a. 1, cor.; a. 2, cor. & ad 4-5; d. 32, q. 2, a. 3, cor.; *EE*, cap. 5; *SG*, II, cap. 49; cap. 73; *RV*, 108; *QP*, q. 3, a. 10, cor.; *QS*, a. 9, ad 3-4; *ST*, I, q. 76, a. 2, ad 2; *QA*, q. 1, ad 2; q. 6, cor. & ad 4; *UI*, cap. 4; *CT*, I, cap. 85. 本稿も基本的にこれらの箇所を考察の対象としている。

6) Cf. *ST*, I, q. 75, a. 2; etc.

7) 「この人間が知性認識する (hic homo intelligit)」というフレーズが端的にそれを表している。Cf. *SG*, II, cap. 73; *QS*, a. 2, cor.; *ST*, I, q. 76 a. 1 cor.; *UI*, cap. 3, cor.; *CT*, I, cap. 85; etc.

以上のような試みのために、本稿では次のような手順で考察を進めていく。第一に、魂が身体を通じて個体化されることを述べているトマスの叙述においては、魂の身体に対する依存が限定的であり、むしろ「存在 (esse)」⁸⁾という点では魂の方が身体よりも優位にあるものとして捉えられている側面があることを、特に「独立した存在 (esse absolutum)」⁹⁾という概念や「この或るもの (hoc aliquid)」¹⁰⁾という概念に着目して概観する。第二に、魂の個体化において身体が有する役割を、「魂の特質 (ratio animae)」という概念や「全体原因 (tota causa; causa totalis)」という概念に着目して明らかにする。以上によって、人間の個体化における魂と身体の間わりを描き出すことが本稿の目的である。

1. 存在という観点における魂の身体に対する優位性

本節では、「存在」という観点における魂の身体に対する優位性について、トマスの叙述に沿ってその考えを概観する。この点に関してトマスが一般的に前提としているのは、可減的な質料から出来ている身体が減んでも、不可減的な知性的魂は減びないということである¹¹⁾。このことを個体化という局面で捉え直すために、『命題集』註解』第一卷第八区分第五問題第二項における議論をまずは参照することにしよう¹²⁾。

同項では魂の単純性が問題とされているが、その第六異論では、魂の個体化という事例を考えた場合に生じる矛盾を導く背理法によって魂の単純性が否定されている。その際に論点となるのが、魂がそれ自体では自らの個体化の原因となるようなものを有しておらず、ただ身体によってのみ個体化されるということである。そのことに基づいて異論は、身体から分離された魂はもはや個体化の原因となるようなものを有さなくなってしまう

8) トマスの用いる「エッセ」という言葉の訳語として「存在」という語を用いるのは便宜上のことであることを予め断っておく。

9) デフェラーリ (Deferrari (1948-49), p. 374) によれば、「独立した存在 (esse absolutum)」という用語が用いられている箇所は次の通りである：SS, I, d. 23, q. 1, a. 1, cor.; II, d. 19, q. 1, a. 1, cor. & ad 3-4; IV, d. 5, q. 1, a. 3, qc. 1, cor.; EE, cap. 5-7; SG, I, cap. 28; QP, q. 5, a. 1, cor.; ST, I, q. 12, a. 4, ad 3.

10) デフェラーリ (Deferrari (1948-49), p. 484) によれば、「この或るもの (hoc aliquid)」という用語が用いられている箇所は次の通りである：SS, II, d. 17, q. 1, a. 2, ad 1; ST, I, q. 75, a. 2, ad 1; QA, q. 1, cor.; etc.

11) Cf. SS, II, d. 19, a. 1; IV, d. 50, q. 1, a. 1; SG, II, cap. 79-81; ST, I, q. 75, a. 6; QA, q. 14; CT, I, cap. 84; etc.

12) SS, I, d. 8, q. 5, a. 2 (Ed. Mandonnet, t. I, p. 227-32).

ので、それぞれの人間の魂の個性性が失われてしまうことを問題視している¹³⁾。

以上の異論に解答するにあたってトマスは、魂が自らの個性化の原因となるようなものを有していないということが、魂が「この或るもの」ではないこと、および魂が「独立した存在」を有さないことを主張する人々の論点にもなっていることにまず言及する一方で、トマス自身は、魂がただ身体によってのみ個性化されることを認めている。このことを踏まえれば、魂自身が自らの個性化の原因となるようなものを有していないということ自体はトマス自身も認めていると考えてよいだろう。しかしながら、以上を踏まえた上でトマスは、身体が消滅しても魂の個性性が失われることはないと主張する¹⁴⁾。その理由を述べている箇所を見てみよう。

【1】

完全性はすべて質料に対しては質料の受容性に即して賦与されるのだから、そのような仕方では魂の本性は相異なる身体に対して賦与されるのだが、それは同じ高貴性や純粋性に即してではない。それ故に、各々の身体において魂は、身体という尺度に即して限定された存在を有するであろう。ところでこの限定された存在は、たしかに魂にとっては身体において獲得されるものの、それにも関わらず [その限定された存在は]、身体にもとづいても、また身体への依存を通じても獲得されるわけではない。それ故に、魂が身体から離れても、各々の魂においてその魂の限定された存在は依然として存続するであろうが、それは、[各々の魂が] しかじかの身体の完全性であった限りで、その魂に随伴した諸々の情念ないし態勢に即したことである¹⁵⁾。

この箇所の前半部では、自身には自らが個性化される原因となるような

13) *ibid.*, arg. 6 (p. 228).

14) *ibid.*, ad 6 (p. 231).

15) *ibid.* (pp. 231-2): ... cum omnis perfectio infundatur materiae secundum capacitatem suam, natura animae ita infundetur diversis corporibus, non secundum eandem nobilitatem et puritatem: unde in unoquoque corpore habebit esse terminatum secundum mensuram corporis. Hoc autem esse terminatum, quamvis acquiratur animae in corpore, non tamen ex corpore, nec per dependentiam ad corpus. Unde, remotis corporibus, adhuc remanebit unicuique animae esse suum terminatum, secundum affectiones vel dispositiones quae consecutae sunt ipsam, prout fuit perfectio talis corporis.

ものを有していない魂が身体との結合によってどのように個体化されるのかというプロセスをトマスは説明している。すなわち、それぞれの魂は「身体という尺度に即して限定された存在」を有するという仕方でも個体化されると述べている。その上で後半部では、そのような「限定された存在」はあくまで身体において獲得されるものの、一度結合した身体から分離された魂においてもそのような限定が保持されることをトマスは主張しているが、その際にトマスが根拠として述べているのは、そのような「限定された存在」が身体に強く依存した仕方でも獲得されるわけではないということだけである。【I】の直前の箇所でも「諸々の魂の個体化は、その始まり（principium）に関しては身体に依存するが、その終わりに関してはそうではない」¹⁶⁾と述べられていたことを踏まえれば、分離された魂の個体化された存在が分離によって存続することを言おうとしているのはわかるが、そもそも魂の個体化された存在が身体との分離の後でも存続することの理由は明言されていない。ここで、同種の議論を行っている『有と本質について』の一節を参照することで、その理由としてトマスが何を考えていたのかということの手がかりを見つけることができる。

【II】

魂の個体化はその端緒に関しては機会的に（occasionaliter）身体に依存するものの、それに関わらず、身体が取り除かれても個性¹⁷⁾が消滅するわけではない。なぜなら、魂は独立した存在を有しているのだから、この身体の形相として造られたことによって個体化された存在が自らに対して一度獲得されたなら、魂の存在は常に個体化されたままだからである¹⁸⁾。

16) *ibid.* (p. 231): ... *individuatio animarum dependeat a corpore quantum ad sui principium, non tamen quantum ad sui finem...*

17) ここでは文意を鮮明にするために《*individuatio*》を「個体化」ではなく「個性」と訳す（以下でも必要があればそうする）。このような訳し分けを正当化する傍証としてトマスの原典において《*individuatio*》という語が明らかに「個性」という属性を意味している箇所を挙げるとすれば次のような箇所がある（ただしこの箇所での主張自体はトマスのものではない）: *SG*, IV, cap. 41 (Ed. Leon., t. 15, p. 141): ... *individuatio autem conveniens humanae naturae est personalitas...*

18) *EE*, cap. 5 (Ed. Leon., t. 43, p. 378, ll. 59-68): *Et licet indiuiduatio eius [=anime] ex corpore occasionaliter dependeat quantum ad sui inchoationem, quia non acquiritur sibi esse indiuiduatum nisi in corpore cuius est actus: non tamen oportet ut subtracto corpore indiuiduatio pereat, quia cum habeat esse absolutum ex quo acquisitum est sibi esse*

この箇所での議論の流れは【I】とさほど変わらないが、注目すべきは、魂の個性が身体との分離の後にも存続することの理由を述べる中で、魂が「独立した存在」を有していることがその根拠になっていることである。ここで想起すべきは、【I】で引用した『命題集』註解』第一卷第八区分第五問題第二項第六異論解答においても、魂が「この或るもの」であること、および魂が「独立した存在」を有しているという論点についてトマスが既に言及していたことである。【II】の箇所を踏まえれば、【I】において明言はされていないものの、魂の個性が身体との分離の後にも存続する理由として、魂が「独立した存在」を有することをトマスは念頭に置いていたと見なすことができるだろう。したがって、魂は身体と分離されても存続するような存在を有しており、それがまさに身体とは「独立した存在」だと見なされているとすれば、可滅的な身体とは異なる不可滅的な魂は、「独立した存在」を有するものとして存在という点では身体よりもより優位なものとして考えられているのではないだろうか。

しかしながら、【I】および【II】の箇所では「独立した存在」そのものが一体何であるのかが明瞭に説明されているわけではないので、魂が身体に対して存在という点で有するような優位性に関しては、別の観点から確認しておく必要がある。それはさきほども言及した、魂が「この或るもの」であるという論点である。この点についてのトマスの説明としては、『神学大全』第一部第七十五問題第二項第一異論解答が参考になる¹⁹⁾。

【III】

「この或るもの」は二つの仕方で解されうる。一つは、何であれ自存するものとしてであり、もう一つは、或る種の本性において完結した仕方で自存するものとしてである。[略]したがってかくして、人間の魂は人間の種の部分であるのだから、それは第一の仕方ではおおよそ自存するものとしてこの或るものであると言われうるが、第二の仕方ではそうではない。というのも、その第二の仕方では魂と身体からなる複合体 [としての人間が] 「この或るもの」であると言われるか

indivduatum ex hoc quod facta est forma huius corporis, illud esse semper remanet indivduatum.

19) 『定期討論集 魂について』第一問題では、「魂は形相でありかつこの或るものであるか」という問題が問われており関連する議論としては重要なものであることを付記しておく。Cf. QA, q. 1 (Ed. Leon., t. 24.1, pp. 3-12).

らである²⁰⁾。

同項では、魂が自存するものかどうかということが問われていて、全体としてそこでは、魂の知性認識を行う働きが魂の自存性の根拠となっており、主文では知性認識を行う源が身体と共同することのないような自らの働きを有しているとまで言われている²¹⁾。以上のことを踏まえれば、「おおよそ自存するもの」としての魂を身体よりも存在という点で優位なものだと捉えることができるだろう。

ただし、【Ⅲ】にもある通り、「或る種の本性において完結した仕方では自存するもの」という意味では魂は自存するものとは言えない。この意味で「この或るもの」と言われるのは、複合実体としての人間だからである。次節では、この点を踏まえて今度は魂の個体化における魂の身体への依存のあり方について考察することで、身体が個体化において果たしている役割を確認することにしよう。

2. 魂の特質における身体

前節では、魂の個体化という文脈において魂が、とりわけ「独立した存在」や「この或るもの」という観点から見れば存在という点で身体よりも優位なものとして捉えられる側面を概観した。以上を踏まえれば、魂にとって個体化の「源 (principium)」としての身体はただの「始まり」にすぎないという側面が強いかもかもしれない²²⁾。しかしながら、魂と身体の合いがどのような性格のものであるかを見極めることによって、人間という複合実体の個体化における「源」としての身体には、単なる「始まり」以上の意味がトマスによって意図されていると言う余地はないのだろうか。言い換えれば、その「源」にはもう少し強く「原因」としての性格を読み込

20) *ST*, I, q. 75, a. 2, ad 1 (Ed. Leon., t. 5, p. 196): ... hoc aliquid potest accipi dupliciter: uno modo, pro quocumque subsistente; alio modo, pro subsistente completo in natura alicuius speciei... Si igitur, cum anima humana sit pars speciei humanae, potest dici hoc aliquid primo modo, quasi subsistens, sed non secundo modo: sic enim compositum ex anima et corpore dicitur hoc aliquid.

21) *ibid.*, cor.: Ipsum igitur intellectuale principium, quod dicitur mens vel intellectus, habet operationem per se, cui non communicat corpus.

22) トマスにおける「源 (principium)」の一般的な定義は次の通り: *Cf. ST*, I, q. 33, a. 1, cor. (Ed. Leon., t. 4, p. 358): ... hoc nomen principium nihil aliud significat quam id a quo aliquid procedit...

むことができるのではないか²³⁾。このことについて吟味を加える中で、本節では魂の個体化における身体の位置づけを定めることにしよう。

まず、魂にとって身体との合一が、トマスにおいてどのような性格のものとして捉えられているのかを『定期討論集 霊的被造物について』第九項第四異論解答という箇所において見ることにしよう。同項は可能知性が人類には一つしかないのかどうかを問題にしている箇所であり、いわゆる知性単一説に対するトマスの批判が述べられている所でもある。その第四異論は、個体化が本質的な原理に即して行われることを大前提とし、身体が魂の本質には属さないことを小前提とした上で、魂が身体によって個体化されないことを結論することにより、身体の数に応じて魂が多数化されないことを主張する²⁴⁾。それに対する解答が次のものである。

【IV】

たしかに身体は魂の本質に属してはいないが、それにも関わらず魂は、自らの本質に即して、すなわち身体の形相であることが魂にとって本質的であるという限りで、身体との関係を有している。[略]したがって、魂の特質に身体の形相であるということが属しているのと同様に、この魂である限りでのこの魂の特質には、この身体との関係を有しているということが属している²⁵⁾。

【IV】では、身体が魂の本質に属さないことは認められながらも、身体の形相であることが魂の本質的な側面として述べられている。さらに、魂一般に関して身体との結びつきが本質的なものであるのと同様に、「この魂」という特定の魂に関しても、「この身体」という特定の身体との結びつきがいわば本質的なものであることが、「この魂である限りでのこの魂の特質には、この身体との関係を有しているということが属している」と

23) 本稿の趣旨とは異なるが、ブラウン (Brown (2002), p. 238) もまたトマスにおける個体化の源に関して「源」という語の意味に着目している。グラシア (Gracia (1984), p. 37) もまたトマスに限らず個体化をめぐる様々な理論の整備を行う際に「源」という言葉の意味に言及している。

24) QS, a. 9, arg. 4 (Ed. Leon., t. 24.2, p. 88, ll. 23-32).

25) *ibid.*, ad 4 (p. 96, ll. 365-73): ... licet corpus non sit de essentia anime, tamen anima secundum suam essentiam habet habitudinem ad corpus in quantum hoc est ei essentiale quod sit corporis forma... sicut igitur de ratione anime est quod sit forma corporis, ita de ratione huius anime in quantum est hec anima est quod habeat habitudinem ad hoc corpus.

いう叙述において読み取れる。すなわち、特定の魂には或る特定の身体が割り当てられていることから、魂の個体化の源としての身体もまた、任意の身体ではなく或る特定の身体でなければならないことがわかる。魂と身体とのこのような積極的な関係性を読み取ることを可能にするような概念連関として、トマスが個体化に関して「原因 (causa)」という語を用いていると思われる箇所を次に引用しよう。

【V】

実際にもし、魂が身体を通じて個体化されるということが、身体が魂の個体化の全体原因であると了解されるならば、それは偽である。それとは反対に、もし身体が或る仕方で個体化の原因であると了解されるならば、それは真である。実際、各々のものは、存在を有しているということに即して、一性および個性性を有している。したがって、身体が魂の全体原因であるのではなく、むしろ魂が自らの特質に即して身体との或る秩序を有している——魂の特質には身体と合一できるということが属するが故に——ということと同様に、身体がこの魂の個体化の全体原因なのではなく、むしろこの魂の特質にこの身体と合一できるということが属し、そしてこのことは身体が減んだとしても魂の中で存続する²⁶⁾。

【V】では、魂の個体化の「全体原因」として身体を捉えることが否定されている。「全体原因」という概念自体の明確な規定をここで得ることはできないものの、魂の個体化という事態を十全に説明できる根拠として「全体原因」という概念を捉えるならば、身体だけでは個体化の原因として十分ではないという意味になるだろう。さらに言えば、前節でも引用した「諸々の魂の個体化は、その始まりに関しては身体に依存するが、その

26) *RV*, 108 (Ed. Leon., t. 42, p. 294, ll. 1181-94): Si enim intelligatur quod anime indiuidentur per corpora, quasi corpora sint causa totalis indiuiduationis animarum, falsum est; si uero intelligatur esse aequaliter corpora causa indiuiduationis animarum, uerum est: unumquodque enim secundum quod habet esse, habet unitatem et indiuiduationem. Sicut igitur corpus non est tota causa anime, sed anima secundum suam rationem aliquem ordinem ad corpus habet, cum de ratione anime sit quod sit unibilis corpori: ita corpus non est tota causa indiuiduationis huius anime, sed de ratione huius anime est quod sit unibilis huic corpori, et hoc remanet in anima etiam corpore destructo. なお *RV* については次を見よ: Torrell (2008³⁾, pp. 243-4, p. 514; Porro (2012), p. 231.

終わりに関してはそうではない」というトマス自身の言明を想起するなら、「個体化の源 (principium)」ということで含意されるのは、個体化の「始まり」における原因性であるのに対して、「個体化の全体原因」ということで含意されるのは、個体化の「始まり」と「終わり」にわたる全体に対する原因性だと考えることができる。

以上を踏まえて、本節で改めて注目したいのは、魂の個体化において身体に対して言われる「個体化の源」という概念の内実である。【V】では「或る仕方では個体化の原因である」とその内実が語られているが、この原因性は「全体原因」という概念との対比の中ではいわば部分的な原因性が示されていることになる。それでは、身体はこの場合、どのような観点で部分的な原因性を担っているのだろうか。第一には、魂の個体化という事態の「始まり」において重要な役割を果たしている。前節でも確認したように、魂は身体によるのでなければ個体化されえないからである。【II】では「機會的に (occasionaliter) 依存する」とも述べられていた。しかしながらこうした点は、次の点を考慮すると、魂と身体の結びつきが偶然的なものであることを意味するのではないと思われる。身体が部分的な原因性を担う第二の論点としては、特定の魂の特質の中に、特定の身体との合一が含まれているということが挙げられる。これは人間の魂が本来的には身体との合一が不可欠なものであることを示すことにはかならない。このこと自体は【IV】でも既に示唆されていたが、【V】ではこのことが、魂の個体化における身体の部分的な原因性の内実として考慮されていることは興味深い。以上を踏まえれば、魂の個体化という文脈において身体に対して言われる「個体化の源」という表現においても、部分的ではありながらも積極的な原因性を身体が有することが含意されていると考えてよいだろう。

それでは、【V】において述べられている「各々のものは、存在を有しているということに即して、一性および個性性を有している」という命題はどのように理解すればよいのだろうか。この命題からは、たしかに「存在」が「一性」および「個性性」に対して先行していることを読み込むことが可能である。さらに一歩踏み込めば、「個性性」の真の原因として「存在」が指定されていると理解することもできるかもしれない²⁷⁾。この

27) Cf. Owens (1994). オーエンスは、人間に関わらずあらゆる実体（特に神）に関しても個体化の源ないし原因が存在であると明確に主張しているが、本稿はそのような一

ような理解をも惹起させる上記の命題を解釈することはトマスの個性化および個性性に関する思想を理解するにあたって重要な課題であると思われる。それ故に、この命題の解釈を以下で提示することにしよう。

結論から言えば、少なくともこの命題にもとづいて、他のあらゆるものに先行した、「個性性」の真の原因として「存在」が指定されていると理解することはできない。前節でも確認したように、非質料的な知性的魂が有する「独立した存在」に即して言えば、身体そのものと比べて魂そのものは存在という点ではより高貴なものであると言えよう。さらにそれは、魂が身体から分離しても魂が自らの個性性を失わない根拠にもなっていた。しかしながら本節で確認したように、魂の個性化という事態にあっては、魂と身体の合一がいわば必然的に含意されているのであって、事柄としては人間という複合実体の個性化という事態が意味されているにすぎない。すなわち、魂が有するような「独立した存在」も、事柄としては人間という複合実体に帰属するにすぎない。少なくともトマスにおいては魂の個性化という事態と人間の個性化という事態は同時に成立することである（すなわち魂が身体に先行して創造されるのではない²⁸⁾）のだから、人間という個体の成立においては「存在」も「一性」も「個性性」も同時に成立していることになるはずであり、それが当該の命題で含意されていることだと考える方がより適当であると思われる。このことはまた、本節で確認したように、魂の個性化において身体がいわば不可欠な役割を果たしていることの証左でもあるだろう。

なお、トマスにおいて人間が魂だけではなく魂と身体との複合でなければならぬわけとしては、彼の復活 (resurrectio) に関する立場も考慮する必要があるだろう。トマスによれば「魂は人間の身体の部分であるのだから、魂が人間全体であるわけではなく、また私の魂も私ではない」(『コリントの信徒への手紙 一』註解』第十五章第二講)²⁹⁾。この聖書註解の一節を解釈することには慎重になる必要があるが³⁰⁾、そこで言わんと

般化を行うものではない。

28) Cf. *SG*, II, cap. 83; *ST*, I, q. 90, a. 4; etc.

29) *CL*, cap. 15, lect. 2 (Ed. Marietti, p. 411, n. 924): ... anima... cum sit pars corporis hominis, non est totus homo, et anima mea non est ego...

30) 一例を挙げれば、引用した一節をもとにして、身体が死滅した状態では人格としての人間は存在しないと主張する説に対してスタンプ (Stump (2004), pp. 40-44) は異議を唱えている (前者の説を唱える代表的な研究としてはケニー (Kenny (1993), pp. 138-9 (邦訳, pp. 236-7)) のものを挙げることができる)。それに対して、本稿の立場はあくまで

されているトマスの間人観がこれまで述べてきたことと重なることをここでは示唆しておきたい。

結

序で述べたように、本稿の目的は、トマス・アクィナスの思想において、人間の魂の個体化が、人間という複合実体の個体化の中にどのようにして位置づけられるのかを見定めることであった。これまでの議論から、身体そのものと比べては存在という点で優位にある魂の個体化も、「魂の特質」に身体との合一が含まれていることを踏まえれば、事柄としては人間という複合実体の個体化の一側面を述べるにすぎないことが確認できるだろう。このような結論自体はいわば自明のことであると思われるが、本稿が特に注目したのは、魂が「独立した存在」を有するということと、身体が魂の個体化にとって「或る仕方では原因である」ということがどのように関わっているのかということである。トマスにおける個体化という概念をめぐる理論全体を見通すためにも、個体化をめぐる議論領域の一つである魂の個体化という論点において、特に「個体化の源」という概念がどのように用いられているのかを見極めることには意義があるだろう。

文献表

[一次文献]

Aquinas, Thomas. *Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*. Romae, 1882-.

CL :

“Super primam epistolam ad Corinthios lectura” In *Super epistolas S. Pauli lectura*, vol. 1, pp. 231-301, ed. R. Cai. Taurini-Romae: Marietti, 1953⁸.

QP :

“De potentia” In *Quaestiones disputatae*, vol. 2, pp. 1-276, ed. P. M. Pession. Taurini-Romae: Marietti, 1965¹⁰.

SS :

I-II :

Scriptum super libros Sententiarum magistri Petri Lombardi episcopi Parisiensis. Tomus I-II, ed. P. Mandonnet. Parisiis: Lethielleux, 1929.

III-IV, d. 22 :

Scriptum super libros Sententiarum magistri Petri Lombardi episcopi Parisiensis. Tomus III-IV, ed. M. F. Moos. Parisiis: Lethielleux, 1933-47.

魂の個体化にとって身体が存在が不可欠であることを主張するにすぎないものである。

IV, dd. 23-50 :

Commentum in quartum librum Sententiarum magistri Petri Lombardi.
Parmae: Typis Petri Fiaccadori, 1858, pp. 872-1259

〔二次文献〕

- Brown, C. M. "Aquinas on the Individuation of Non-Living Substances." *Proceedings of the American Catholic Philosophical Association* 75 (2002): pp. 237-54.
- Busa, R., ed. *Index Thomisticus: Sancti Thomae Aquinatis operum omnium indices et concordantiae in quibus verborum omnium et singulorum formae et lemmata cum suis frequentibus et contextibus variis modis referuntur.* 56 voll. Stuttgart: Fromann-Holzboog, 1974-80.
- Deferrari, R. J. *A Lexicon of St. Thomas Aquinas Based on the Summa Theologica and Selected Passages of His Other Works.* Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 1948-49.
- Gracia, J. J. E. *Introduction to the Problem of Individuation in the Early Middle Ages.* München: Philosophia Verlag, 1984.
- 加藤雅人. 「トマスにおける「個」の意味」『中世思想研究』27 (1985): pp. 133-41.
- 川添信介. 「トマスはシゲルスを論破したか——知性単一説と人間の魂の *communi-care esse*」『中世思想研究』37 (1995): pp. 1-16.
- Kenny, A. *Aquinas on Mind.* London: Routledge, 1993.
邦訳: ケニー 『トマス・アクィナスの心の哲学』川添信介訳, 勁草書房, 1997.
- Klinger, I. *Das Prinzip der Individuation bei Thomas von Aquin. Versuch einer Interpretation und Vergleich mit zwei umstrittenen Opuscula.* Münster: Vier-Türme-Verlag, 1964.
- 桑原直己. 「トマス・アクィナスにおける「能動知性」と「個としての人間」」『哲學』47 (1996): pp. 197-206.
- 大鹿一正. 「個体化の根源に関する一考察——トマス・アクィナスとドゥンス・スコトゥスにおける」『中世思想研究』38 (1996): pp. 1-19.
- Owens, J. "Thomas Aquinas (b. ca. 1225; d. 1274)." In *Individuation in Scholasticism. The Later Middle Ages and the Counter-Reformation 1150-1650.* pp. 173-94, ed. J. J. E. Gracia. Albany: State University of New York Press, 1994.
- Porro, P. *Tommaso d'Aquino. Un profilo storico-filosofico.* Roma: Carocci editore, 2012.
- Stump, E. "Aquinas's Metaphysics: Individuation and Constitution" In *Categories. Historical and Systematic Essays.* pp. 33-44, ed. M. Gorman & J. Sanford. Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 2004.
- Torrell, J-P. *Initiation à saint Thomas d'Aquin. Sa personne et son œuvre.* Paris:

Éditions du Cerf, 2008³ (1993¹).